

幼稚園教諭養成課程における教材研究力の育成に関する一考察 —『幼児期から児童期への教育』の分析を通して—

中 川 智 之

Considerations on Enhancing Teaching Material Development Abilities of Teachers in Kindergarten Teacher Training Course

— An Analysis of *Education in Early Childhood to Elementary School* —

Tomoyuki NAKAGAWA

キーワード：幼稚園教諭，養成課程，教材研究，育成

概 要

本論は、幼稚園教育における教材及び教材研究の方法について考察し、幼稚園教諭養成課程における教材研究の力量を向上させる方途を検討するものである。具体的には、国立教育政策研究所教育課程研究センターによる『幼児期から児童期への教育』を幼稚園教育における教材及び教材の研究に焦点を当てて分析した。その結果、幼稚園教育における教材研究には、①指導内容との関連における教材の選定・構成、②実際の活動における指導案、③指導内容・教材に関する文化・特性、④一般的な幼児の発達、⑤園に在籍する幼児の特徴・個性、⑥幼児に即した柔軟な対応、の観点が重要となることを示した。また、幼稚園教育における教材研究の複雑さについて明示した。最後に、幼稚園教諭養成課程における教材研究の力量を向上させるための方策について検討した。今後の課題として、演習に利用し得る教材の開発と、その教育効果の確認の必要性を指摘した。

1. 緒 言

本研究の目的は、幼稚園教育における教材及び教材研究の方法について考察し、幼稚園教諭養成課程における教材研究の力量を向上させる方途を検討することである。

幼稚園教諭を養成する課程においては、学内において一通りの幼稚園教諭としての素養を身につけた上で教育実習を行い、課程を修了する直前に教職実践演習を履修することとなっている。教育実習までに幼稚園教諭として一定水準の力量を身につけているとはいえ、実習生の段階では教育実習において十分な働きができるわけではない。実際の教育現場において経験を積み、幼稚園教諭としての力量を向上させるとともに、課題を得て大学に戻ってくるのが実情であると言える。

幼稚園教育実習における責任実習（指導実習）を経

験した後のレポートを分析した山田秀江（2012）は、指導者からのアドバイスとして最も多かったのは、指導時の幼児への援助であり、それに次いで多かったのは教材研究に関するアドバイスであったと報告している¹⁾。また山田は、実習事後のレポートの中に、「ねらい」に関する内容がほとんど見られなかったと述べている。これは、幼稚園での教育実習及び保育所での保育実習を終えた4年生に、造形活動に関する質問紙調査を実施した島田由紀子（2015）の結果とも共通している。島田は、造形活動で重視することについて、選択肢の中から複数回答を求めたが、「幼稚園教育要領・保育所保育指針」を選択した学生は最も少なかった²⁾、^{注1)}。これらのことから、教育実習に出るまでに、特にねらいとの関連の中で教材研究をする力量をより向上させる方策が望まれると言えよう。

玉置哲淳（2006）は、「指導案の編成はほとんど保育現場での実践研究に依拠してきたため、幼児教育における保育方法論は結局名人技になる傾向がある」と指摘する³⁾。これに関連して、卜田真一郎（2006）は、「幼児教育の方法論は、「共感する」「援助する」など

（平成27年10月28日受理）

川崎医療短期大学 医療保育科

Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

の巨大語で説明されている側面があり、具体化された方法論として確立されているとは言い難い。一方で保育現場では、各保育者の経験に基づいた方法論が使われているのではあるが、それが方法学として整理されていないが故に、結果的に一般化が難しく、個人的な体験の領域をでていないという課題がある」と指摘している⁴⁾。

「教材」という用語は、『幼稚園教育要領』においては使用されておらず、『幼稚園教育要領解説』においては、小学校教育に関する記述に1箇所使用されているのみである^{注2)}。一方、国立教育政策研究所教育課程研究センターが、幼稚園における適切な教育課程の編成及び実施上の参考資料として編集した『幼児期から児童期への教育』では、1節を割いて、教材研究について解説されている⁵⁾。

そこで本論では、この『幼児期から児童期への教育』を教材及び教材の研究という観点から分析することにより、幼稚園教育における方法論について考察し、幼稚園教諭養成課程における教材研究の力量を向上させる方途を検討する。

2. 幼稚園教育における教材研究を捉える観点

『幼児期から児童期への教育』は、「家庭・地域社会・幼稚園等施設の三者による総合的な幼児教育の推進と、幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」を図るための資料となるものである⁶⁾。教材研究については、第2章第2節「幼児理解と教材研究を深める」において、解説されており、その主な内容を整理したものが表1である。整理するに際し、それぞれの記述の内容に以下の観点が含まれているかどうかを確認した。

一般に、教材とは、「児童・生徒が学習して一定の目標を達成（学力形成）するために選択された文化的素材（事実、事象、資料、作品など）であり、授業のなかで意味づけられるもの」である⁷⁾。天野正輝（1995）は、教材研究について、「①ある教科内容を教えるとき、素材として何を選び出し、それをどう構成するかという課題、②ある教科内容、ある教材をどう授業案に具体化するかという課題、③そして教科内容や教材の背景となっている人類の文化遺産の研究という課題を追求すること」と、教材研究を3種類に区分している⁸⁾。

これらは、幼稚園における教材研究について考える際にも有効な区分であると想定される。すなわち、①

ある領域の内容を指導する際の教材の選択と構成に関する研究、②ある領域の内容、ある教材を実際の活動の中でどのように具体的に扱うかという指導案の作成に関する研究、③領域の内容や教材の背景となっている文化遺産、教材の特性に関する研究、という3つの観点である。加えて、『幼児期から児童期への教育』の内容から、幼稚園教育における教材研究について検討すると、④一般的な幼児の発達に関する研究、⑤幼稚園に在籍する具体的な幼児個人の理解に関する研究、⑥活動場面における幼児の教材への多様な関わり方に対する柔軟な対応に関する研究、の3つの観点も重要になると推察される。

上記①～⑥の6つの観点が、どの程度『幼児期から児童期への教育』の内容の中に含まれているのかを確認するために、表1の右部分に、それぞれの内容と関連すると考えられる観点には「○」を、若干の関連をもつ可能性があるものには「・」を記した。なお、表の最下部には、それぞれ①～⑥の観点における○の数を記した。

『幼児期から児童期への教育』においては、想定された通り、小学校以降の学校教育においても適用し得る①～③の観点が、一定数認められた。他方、④～⑥の観点も、①～③の観点と同程度、幼稚園教育の教材研究に関する説明において確認することができた。また、表1に示された通り、これら①～⑥の観点は単独で示されるのではなく、複数の観点が組み合わされて教材研究の説明に用いられていた。『幼児期から児童期への教育』においては、これら①～⑥の観点における教材研究が単独でその効力を発揮するというものではなく、相互に関連し合いながら、教材研究の効果を高めるものであることが示されていると言えよう。

以上のことから、幼稚園教育における教材研究には、①指導内容との関連における教材の選定・構成、②実際の活動における指導案、③指導内容・教材に関する文化・特性、④一般的な幼児の発達、⑤園に在籍する幼児の特徴・個性、⑥幼児に即した柔軟な対応、の観点が重要となると言える。教材研究に関する力量は、上記①～⑥の能力と、それらを実践において総合的に利用できる能力の育成により、向上させることができよう。

3. 教科教育と幼稚園教育における教材研究の相違

前節で示した④～⑥の観点が、『幼児期から児童期への教育』において繰り返し提示されているのは、幼稚

表1 『幼児期から児童期への教育』に見られる幼稚園教育における教材に関する主な記述

内 容	具 体 的 な 記 述	観 点						
		①	②	③	④	⑤	⑥	
子どもと教師による教材の選択	●必ずしも教師が教材を選択し、一方的にそれを子どもに与えることを意味しているものではない。子どもが教材と対面し、それらとかかわる中で、子ども自身がその面白さを見いだしたり、知識を発見したり、技術を獲得したりして、教材の意味が見いだされ、教材としての価値が決められていく。ある意味で、子どもと教師とで教材を選択しているとも言える。したがって、子ども理解に基づく教材の選択が重要なのである。	○			○	○		
	●とりわけ、環境を通して行う教育を基本とする幼稚園教育では、あらかじめ教師が幼児の活動を予想して用意した教材であったとしても、幼児は教師の予想を超えて多様なかかわり方や使い方をすることが少なくない。また、教師が教材として用意したものではないのに、幼児が興味をもってかかわり、人や物とのかかわりを深める面白い教材となっていくこともある。幼児の教材とのかかわりから、教師の教材選択の在り方を考えさせられることも多々あり、幼児理解に基づいて教材を考えることが重要である。				○	○	○	
教材研究	●教師には、幼児を理解しその発達を見通すことや、ものの特性や特質を見極める目が求められる。幼児とものとかかわりを理解し、かかわりを深めるためにはどうしたらよいかを考えることが、幼児と教材とのかかわりを研究することであり、それを教材研究と言うのである。		○	○	○	○		
	●幼稚園教育における教材研究は、幼児の周りにある様々なものの教育的価値を見だし、整理し、実際の指導場面で必要に応じて構成したり活用したりできるようにするための準備である。	○	○	○				
教材研究の対象	●幼稚園教育では、幼児がかかわるすべてのものが、教材としての価値をもつものとなる可能性がある。したがって、幼児の周りに存在する様々な人や物、生き物、自然現象、社会現象、歌や絵本などを含め様々なものが、教材研究の対象となりうる。	●	●	○				
幼児の興味・関心	●教材の選択に当たっては、幼児の興味や関心がどこにあるのかを把握する必要がある。また、教材として取り上げたものが、幼児にどのように受け止められ、どんな意味をもつのかを理解し、さらに、幼児の活動にどう影響するかをとらえることが必要になる。同じ場で遊んでいても、幼児の興味や関心が異なることもある。	○	●			○		
	●幼児がどんなことに興味をもって遊んでいるのか、何を楽しんでいるのか、何を實現したいと思っているのかにより準備する教材や環境の構成は異なってくる。幼児が、その興味や関心に応じて適当な教材と出会えるよう、教材を精選し、環境を構成していくことが必要となる。	○	○			○		
幼児の発達	●幼児の興味や関心だけでなく、幼児の発達に目を向けて、発達に即した教材の選択も必要であり、さらに、幼児が教材とかかわる中で何を学んでいるかを把握する必要もある。	●			○	○		
	●発達の時期や活動を通して育てたいことに沿って、教材や環境の構成を考える必要がある。	○	○		○	○		
指導のねらい	●当然のことではあるが、教師が幼児の中に育ててほしいと思うことや指導のねらいによって、教材の選択も提供の仕方も異なってくる。	○	○		○	○		
	●指導のねらいによって準備する教材を選択し環境を構成する際に留意したいことは、その教材と幼児とのかかわりから、改めて幼児の発想や教材のもつ可能性を把握していくことである。	○	○		○	○	○	
幼児の主体性の重視	●教師がねらいに沿って、しかも幼児理解を深めて選択した教材であっても、幼児がその予想を超えて活用したり、その反対に全く興味を示さなかったりすることがある。大切なことは、それから教師が何を学ぶかである。教材として選択したからといって無理やり幼児に押し付けるのではなく、幼児にとって意味をもつものとなるためにはどうしたらよいかを考えていくことが大切である。	●			○	○	○	
	●教師が、教材にかかわらせようとするほど、幼児の主体的な遊びからはかけ離れてしまうこともある。教材にかかわる幼児の姿をしっかり見ていくことが大切である。					○	○	
教材の配置	●幼児同士のかかわりの状況から、教材の選択やその配置を考えることも必要である。	○	●			○	○	
	●大切なことは幼児が遊びに没頭し充実感を味わっていくようにすることであり、そのために必要な教材が適当に置いてあることである。		○					
教材の提供と遊びの充実	●教材とのかかわりが深まっていくことで遊びが充実していくことから教師はあらかじめ教材のもつ特質や特性をよく理解し、幼児の遊び方やかかわり方に即して、どのように取り上げていくかについて、予測をもつことが大切である。	○		○	○			
	●教師も一緒に考えながら新たな教材を提供したことで、幼児の関心が高まり、もっとこうしたいという思いをもつようになり遊びが充実している。						○	
教師の教材観	●次々と遊びが展開し充実していく環境を構成するためには、教材に対する教師の考え方やとらえ方、すなわち、教材観が大切である。幼児の周りにある様々なものには、どんな教育的価値があるのか、幼児の活動をどう広げ深めていくのか等、教材のもつ可能性を広くとらえられる教師の豊かな教材観が重要である。		●	○				
	●例えば、粘土は造形遊びをするもの、縄跳びの縄は跳ぶものという、固定化した教材観では、幼児の活動も広がらない。教材とかかわる幼児の姿から、教材のもつ可能性を広げてみていくことができるような柔軟な教材観をもつことが大切である。				○		○	
教育環境の整備	●幼稚園の教育環境や教育活動を充実させるために、幼稚園の教師全体で取り組むことが必要な教材研究もある。幼児の使いやすさや安全性から、遊具や用具の点検や効果的な配置を検討する、園庭の自然環境を四季折々の季節を楽しめるよう整備する等、よりよい教育環境を創造するための課題や、教育活動を充実して展開するための課題は限りなくある。各幼稚園においては、幼児の楽しく充実した豊かな活動が生まれるための教材研究に努めていきたいものである。	○		○				
		○の数	10	8	7	8	12	7

※ 観点①～⑥は、①教材選定、②指導案作成、③文化・特性の理解、④発達過程の理解、⑤幼児理解、⑥柔軟な対応、を示す。
『幼児期から児童期への教育』(2005)を元に、筆者作成。

園教育では小学校以降の学校教育における教科の考え方が用いられていないことと関連すると考えられる。

天野 (1995) は、教科について、「一般に、教育目標を達成するために児童・生徒に教授すべき教育内容のまとまりであり、人類と民族の文化遺産を学習者の発達に応じて、最も効果的に習得させるように系統的に組織したもの」と説明している⁹⁾。佐藤学 (1996) は、「教科は知識を分類して体系的・段階的に組織している」と、説明している¹⁰⁾。

すなわち、小学校以降の学習指導要領では、系統だった知識が、すでに学習者の発達を考慮して配列されているのである。学習内容の体系的・段階性に考慮すれば、学習者の発達の状況を殊更意識しなくても、教材の研究が可能となる。小学校以降の教科教育においては、学習指導要領に定められた内容を児童生徒が習得することが求められており、授業の目標もその学習内容から自ずと規定されてくる。教材は、その学習を円滑に進めたり、理解を深めたりするためのものであり、教師が選定・研究した教材を、児童生徒が学習において使用することが多い (図1)。

一方、幼稚園教育における領域は、幼児の発達の側面から、幼稚園修了までに育つことが期待される心情、意欲、態度などのねらいと、ねらいを達成するために指導する事項をまとめたものである。具体的には、『幼稚園教育要領』には、領域毎に、幼稚園修了までに育つことが期待されるねらいと、ねらいを達成するために指導する事項が示されている。また、『幼稚園教育要領解説』には、幼児の幼稚園生活への適応の状態、興味や関心の傾向として、5つの時期区分が一例として挙げられている^{11), 注3)}。しかしながら、幼稚園修了まで

に、ねらいに示されている姿に幼児が至るまでの段階や時期との関連は示されていない。

さらに、幼稚園教育は、『幼稚園教育要領』の総則に示されている通り、「環境を通して行うもの」であり、「幼児の主体的な活動」を重視するものである¹²⁾。加えて、「幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること」も求められる。これらのことを考慮し、表1にまとめた『幼児期から児童期への教育』の内容を参考にしながら、幼稚園教育における教材の使用について図示したものが図2である。

教科教育における授業の目標は、教科の内容からある一定範囲に定まってくるものであるが、幼稚園教育においては、幼児の興味・関心や発達の状態に応じて、一人一人に対する活動のねらいは異なってくる (ねらいA~C)。実際に研究・選択し利用する教材についても、教科教育においては、その学習内容や利用できる

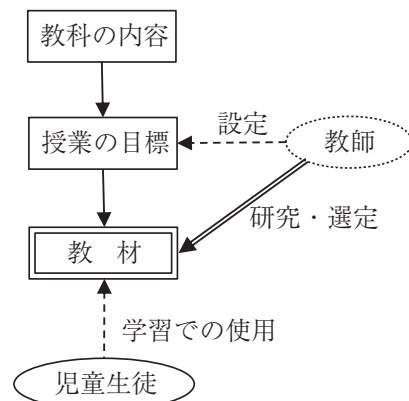


図1 教科教育における教材の使用

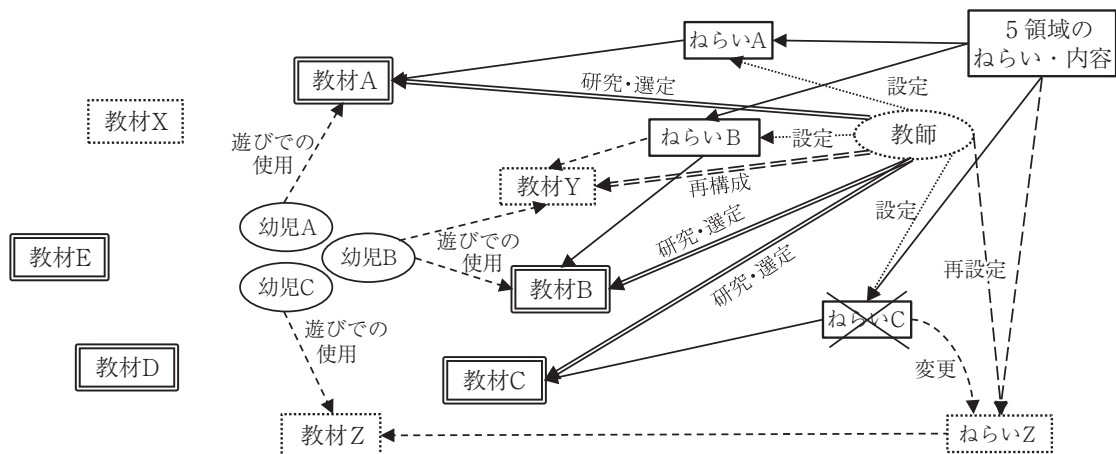


図2 幼稚園教育における教材の使用

授業時間等から教材を絞りやすいと言えよう。一方、幼稚園教育においては、一人一人の興味・関心や発達の状態に応じて、異なる教材を用意する必要があったり（教材A～C）、同じ教材であっても異なる提示の方法が求められたりする。幼児の教材へのかかわりによっては、想定していなかった異なる教材を提示して環境を再構成することが、ねらいの達成に寄与することもある（教材Y・ねらいB）。また、教師が用意した教材（教材A～E）ではなく、他の周囲の環境（教材X～Z）に興味・関心をもち、遊びに取り入れる幼児が出てくることもある（幼児C）。その際には、柔軟にねらいを変更して活動を進めることも求められる（ねらいC→ねらいZ）。

このような柔軟な対応が可能なのは、幼稚園教育要領に示されているねらいが、「幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度など」であるためである¹³⁾。すなわち、目標を達成することが求められるのは幼稚園修了までであり、小学校以上の教科教育に比べて、時間的にゆとりがあると言える。また、これらのねらいは、「幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうもの」である。その活動において当初のねらいが達成できなかったとしても、その活動において意図していなかった幼児の成長があれば、その成長を促すために確保していた時間を、当初のねらいを達成するための他の活動に置き換えることが可能となると言えよう。

幼稚園教育における教材は幼稚園の環境全てであり、教科教育の教材と比べその教材研究の対象となる範囲は広いと言える。加えて、ねらいや教材、及びその提示の方法は幼児によって多岐にわたるため、教材研究はより複雑で困難なものとなる。これらのことが、幼児教育における保育方法論が名人技になる傾向があると指摘される一因と考えられる。

4. 幼稚園教諭養成課程における教材研究力の育成

教科教育においては、その学習内容が系統性をもっているために、学習内容に関する理解を深めることで教材研究が可能になると言える。しかしながら、幼稚園教育においては、学びの内容やその順序に柔軟性があるため、実際の幼児の姿や幼稚園の環境に加え、園での生活を十分に理解することが重要となる。すなわち、まず、一般的な幼児の発達過程の理解（観点④）を基盤とした、園に在籍する幼児の理解（観点⑤）が

重要となる。その上で、ねらい及び教材の選定（観点①）と、実際の場面での環境構成及び援助を検討（観点②）することが可能となるため、実際の幼稚園での経験を積まなければ、教材研究を進めることは容易ではないと言えよう。また、幼児に即した柔軟な対応（観点⑥）に関しても、実際の幼児に関する理解（観点⑤）を深め、実践と省察を繰り返す中でこそ、その力量の向上が図られると言えよう。

しかし、幼稚園教諭養成課程においては、教育実習までに一定水準の力量を育成することが求められる。そのための方策の1つとして、養成課程のできる限り早い段階で、インターンシップなどにより、幼稚園の教育現場における遊びの指導を経験できる機会を設定することが考えられる。教育課程上可能であれば、実習を複数回実施するという方策も考えられよう。同一の幼児を1年間にわたり何度か観察する機会を設定できれば、幼児の発達に関する理解が深まり、その後の学習や教材研究にとって有益であると言える。

別の方策として、『幼稚園教育要領』において領域毎に示されている指導内容に関して、発達過程における大まかな順序性を学生に示すことが有益であろう。例えば、入門期、基礎期、応用期等のように大まかにでも、幼児の発達の状態や時期と、指導内容の高まりとを関連させて示すことができれば、学生は幼児の発達や指導の要点に関して見通しをもつことができる。これらの情報を、学内での演習における、指導内容と関連した教材の選定や指導案の作成、模擬保育等の際に利用することにより、学習の効果を高めることができよう。

また、学内における科目間の連携を強化することも重要となる。具体的には、「教育職員免許法」及び「教育職員免許法施行規則」を参照すると、「教科に関する科目」は、③の能力の育成に関連が深いと考えられる。また、「教職に関する科目」第三欄「教育の基礎理論に関する科目」の「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）」は、④の能力の育成に、第四欄「生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目」の「幼児理解の理論及び方法」は、⑤の能力の育成に関連が深いと考えられる。①②の能力の育成に関しては、第四欄「教育課程及び指導法に関する科目」の「教育課程の意義及び編成の方法」「保育内容の指導法」「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）」が関連が深いと考えられる。前述した

通り、幼稚園教育において①～⑥の関連が重要となることを考えれば、幼稚園教諭養成課程においては、小学校以降の学校教育に関わる教諭を養成する課程以上に、多数の科目間での連携が求められていると言えよう。課程全体で有機的な指導が可能となるよう、各科目の順序性や教員間における協力体制を構築することが肝要であろう。

単一科目の中での方策としては、例えば、「教科に関する科目」においては、各領域の指導内容の内、教科の内容と関係があるものについて解説を加えることにより、授業で向上を図る③に関する学生の能力だけでなく、①の教材選定力との関連が強化されるであろう。

「保育内容の指導法」の科目においては、幼稚園における教育活動を見学し、具体的な場面における幼児の姿を領域に示されている指導事項との関連から捉えるとともに、その幼児に対する幼稚園教諭としての関わりについて考察する方法が考えられる。その後、その捉え方や考察した幼児への関わりについて、普段の幼児の姿を把握している幼稚園教諭から講評を受けることができれば、その学びをより深化させることができよう。

他に、学内における演習として、指導案を作成する際に、活動中の幼児の姿を、ねらいに基づき複数想像するという学習活動も有効であろう。幼児の教材とのかかわりが深まり遊びが充実していったときの具体的な幼児の姿だけでなく、逆に、ねらいを十分に達成できないときの幼児の姿（遊び方が分からず十分に楽しめない、想定した活動ではなく異なる遊びになってしまう、遊びにすぐ飽きる、楽しんで遊ぶがねらいとは異なる楽しみ方をする等）を想像することが肝要である。演習の初期には、遊びが充実した姿として想定したものの中に、想定したねらいとは異なるねらいを達成した状況が入り込むことが予想される。そのような際には、他の領域を含めて、5領域の中の異なるねらい・内容に近いことを丁寧に説明することにより、学生の理解を深めていくことができよう。また、ねらいを十分に達成できないときの幼児の姿を想像することができるになれば、指導案の改善すべき部分を意識しやすくなり、複数の改善案の中から効果の高いものを選定する際にも有益となる。このような観点から、上級生の実習での事例等、上手いかなかった実例をたくさん集め、演習活動に利用することも、教育効果を高める方策となると言えよう。

本論では、幼稚園教育における教材及び教材研究に

ついてその特徴を検討し、幼稚園教諭養成課程における教材研究力を育成する方途について考察した。今後、幼児が入園してから『幼稚園教育要領』において示されているねらいを達成するまでの過程に関する実態調査、演習で用いることのできる失敗事例の収集、領域毎の指導内容と関連の深い指導案作成の題材として適当な活動の検討等、演習に利用し得る教材の開発と、その教育効果の確認をすることが求められよう。

5. 注

- 注1) 用意された選択肢は、「季節や行事のつながり」「活動時間」「費用」「以前、授業や実習でやったことがある(自分の経験)」「事前準備の労力」「幼児の発達」「幼児の興味関心」「幼児の造形経験」「園の方針」「幼稚園教育要領・保育所保育指針」「その他」であった。「幼稚園教育要領・保育所保育指針」を選択した学生をグラフから読み取ると、54名中1名だったようである。この結果を受け、島田は、「実習事前指導や授業では、幼稚園教育要領や保育所保育指針の重要性が伝えられ、実習時にも持参しているが、少なくとも造形活動を考えるときにはあまり重視されていないことがわかった」と述べている。
- 注2) 「幼稚園では計画的に環境を構成し、遊びを中心とした生活を通して体験を重ね、一人一人に応じた総合的な指導を行っている。一方、小学校では、時間割に基づき、各教科の内容を教科書などの教材を用いて学習している」という記述であった。この幼稚園教育と小学校教育の対比から、幼稚園教育における「教材」には、少なくとも「環境」「遊び」「生活」が含まれると考えられよう。
- 注3) 具体的には、「ア)一人一人の遊びや教師との触れ合いを通して幼稚園生活に親しみ、安定していく時期」「イ)周囲の人やものへの興味や関心が広がり、生活の仕方やきまりが分かり、自分で遊びを広げていく時期」「ウ)友達とイメージを伝え合い、共に生活する楽しさを知っていく時期」「エ)友達関係を深めながら自己の力を十分に発揮して生活に取り組む時期」「オ)友達同士で目的をもって幼稚園生活を展開し、深めていく時期」の5つである。

6. 文 献

- 1) 山田秀江：幼稚園教育実習における保育実践力の学びに関する一考察—責任実習の実践報告から—, 四條畷学園短期大学紀要45: 51—61, 2012.
- 2) 島田由紀子：保育系学生の实習における造形活動, 和洋女子大学紀要55: 109—117, 2015.
- 3) 玉置哲彦：保育方法論の構想(覚え書き)—活動アナリシスアプローチ指導を使った指導案作りの提案—, エデュケア27: 1—14, 2007.
- 4) 卜田真一郎：活動アナリシスアプローチを用いた「作って飛ばす活動」の保育方法の提起(第1報), エデュケア27: 41—57, 2007.
- 5) 国立教育政策研究所教育課程研究センター：幼児期から児童期への教育, 大阪：ひかりのくに, 2005.

- 6) 同上著.
- 7) 天野正輝：教育方法の探求, 京都：晃洋書房, pp.143—168, 1995.
- 8) 同上著, pp.143—168.
- 9) 前掲著7), pp.71—109.
- 10) 佐藤学：教育方法学, 東京：岩波書店, pp.105—134, 1996.
- 11) 文部科学省：幼稚園教育要領解説, 2008.
- 12) 文部科学省：幼稚園教育要領, 2008.
- 13) 同上著.

